今号の
オープニング
メッセージ

Opening Message

自分がいた世界の「外」の人たちが教えてくれた私の仕事の意味

職業と私 × 魚住りえ

フリーアナウンサー
スピーチ・ボイスデザイナー

アナウンサーとはどんな職業か。高校生の私がイメージしていたのは、“テレビの中で原稿を読む人たち”でした。

高校で放送部に入り、アナウンスメントや朗読を始めました。単なる音読ではなく、筆者の意図を汲み取り相手に届ける「音声表現」としての朗読に興味をもち、アナウンサーを目指すように。1995年、日本テレビに入社。ニュースの原稿読みから、バラエティー番組で歌って踊って、ものまねをするまで（笑）楽しみながら、多彩なチャレンジをさせていただきました。

2004年にフリーになり、テレビやラジオの仕事を続けていましたが、40歳を目前に、はたと立ち止まりました。自分という存在を世に役立てるためには、このままで良いのか。就職活動の自己分析のように、今度は「社会」に就職するつもりで、自分を見つめ直し、改めて仕事を捉え直

職業と私 × 魚住りえ
フリーアナウンサー
スピーチ・ボイスデザイナー

したいと思ったのです。

そこで、テレビ局員ではなく、さまざまな世界で働くビジネスパーソンに話を聞きに行ったところ「自分の声が嫌い」「なかなか自分の言葉が出てこない」といった悩みを聞きました。

思えば私も、アナウンサーになりたての頃はフリートークが苦手でした。それでも年々、力がついてきたのは、ナレーション番組の仕事をしていたから。プロが書いた原稿の意図を汲み取り、朗読することで、話し方の技術が向上していたのです。話し方、聞き方、声の出し方…。アナウンサーとは技術集団なのだと改めて思い至り、そのとき、自分が培ってきた技術と、その活かし方が見えた気がしました。そしてスピーチやボイストレーニングの技術をメソッド化し、伝えていくことに。声が良くなるだけで、みんなが振り向いてくれる。話し方が変わると、人生が変わる。だから私は、それぞれの人生をより良くデザインできる存在になりたいと、トレーナーではなく「スピーチ・ボイスデザイナー」を名乗ることにしました。

職業にはもちろん、お金を稼ぐ手段としての面もあります。でも、それだけではありません。自分の得意なことや好きなことで社会に必要とされるのは、かけがえのない喜びです。ただ、その「自分」が、なかなかわからない。高校生なら尚更でしょう。だから先生方も、目の前の生徒さんがどんな人なのか、何をしているときが一番楽しいのか、ぜひじっくりと聞いてあげてください。誰かに話を聞いてもらうこと、誰かの話を聞きに行くことで、自分を知る。その先に、自分なりの仕事のかたちが見えてくるのかもしれません。

Profile

うおずみ・りえ●1972年生まれ、大阪府出身。1995年、日本テレビにアナウンサーとして入社。『ジパングあさ6』『所さんの目がテン！』などを担当。2004年にフリーに転身。30年に渡るアナウンスメント技術を活かして「魚住式スピーチメソッド」を立ち上げる。現在は、話し方を磨くための指導を行うボイスデザイナー・スピーチデザイナーとしても活躍中。

話し方が上手くなる！ 声まで良くなる！ 1日1分朗読（東洋経済新報社）

取材・文／塚田智恵美

特集

イメージを超える職業観

数ある職業から自分がなりたいもの、自分に適したものを見つけるためには、自己を掘り下げると同時に、世の中にはどのような職業があり、日々どのような仕事をしてどのような価値を生み出しているのかを知ることが不可欠です。

一方、SNSやインターネットでの情報収集が当たり前になった現代では、職業に対しても一面的な情報から「知ったつもり」になりがちです。特に、まだ社会との接点が少ない高校生は、職業に対する漠然としたイメージや固定観念に縛られ、進路の選択肢を狭めてしまうこともあるでしょう。また、急速に社会が変化するなか、新しく生まれた職業や、従来とは仕事の内容や働き方が変わりつつある職業も出てきています。

そこで今号では、職業に対する思い込みを外し、働くことや自分の進路に対して想像力を広げるにはどうすればいいのか、多角的にアプローチします。本特集の視点が、進路指導やキャリア教育の一助になれば幸いです。

私の仕事は、
地方公務員（行政事務）です。
人と地域をつなげる

私の仕事は、~~農家~~です。
お客さんと家族みたいにつながる農家
地域を担うこと

私の仕事は、~~営業~~です。
地元の仲間の輪をひろげること

私の仕事は、花屋です。
人と街をつなぐコミュニティ花屋

interview

社会人8人に聞く

あなたの仕事は何ですか?

公務員、看護師、農家…こういった職業名を聞いて、どのような仕事を想像しますか?「データサイエンティストってどういう仕事?」「エンジニアって何をする人?」と生徒に尋ねられたら、どのように説明しますか?「仕事＝職業」ではないのではないか…という問いを起点に、一人ひとりにお話を伺ってみることに。すると、職業というカテゴリーではまとめ切れない、その人ならではの仕事が見えてきました。

私の仕事は、
~~ソフトウェアエンジニア~~です。
パソコン1つで世界を創ること

私の仕事は、看護師です。
自分で道を切り拓く看護師

私の仕事は、
~~データサイエンティスト~~です。
今日より明日を良くすること

私の仕事は、
~~鉄道作業員~~です。
人知れずあたりまえをつくること

山口県 観光スポーツ文化部
文化振興課 主査
矢野展子さん

1

私の仕事は、地方公務員（行政事務）です。

人と地域をつなげる

京都の大学を卒業後、地元に戻り山口県職員として働いています。初任地は岩国健康福祉センターで、その後は本庁の人事課、国際課、財政課、医療政策課、教育政策課を経て、現在、文化振興課に属しています。異動の間隔は3年ないし4年。そのたび業務内容も職場の雰囲気も変わり、転職したような新鮮な気持ちになるとともに、「一から勉強だ」と引き締まります。ただ、法律に基づく仕事という基本は共通で、経験を活かせることも多く、物事がより俯瞰的に見えるようになってきました。私の場合、許認可や人事、予算対応など、行政職員らしい業務が多いですが、

1

県庁には、外部へのプロモーションを積極的に行う産業振興系の部署や、独創的な企画が求められる広報や観光関連の部署もあります。異動が多いということは、どんなタイプの職員でも持ち味を発揮できる場があるともいえるんです。

職場は県内とは限りません。特産物の販路開拓や観光客誘致の部署では海外で働く機会も多いし、私も留学生・研修生の受入や交流事業の関係で海外出張もしました。山口県東京事務所などでの勤務や、中央省庁への研修派遣、民間企業との交流人事も盛んです。

こうした点も含め、高校生が抱く公務員像と実際とでは多少のギャップがあるかもしれません。「安定」した職場と言われますが、安定の意味が雇用や待遇ではなく、「単調な業務をこなし定時で帰れる仕事」というイメージであれば、実際は違います。部署にもよりますが、業務量が非常に多くなる時期もありますし、常に世の中の動きを把握し、情報をアップデートする必要もあります。

仕事の進め方も、個人の裁量に任される部分も多く、積極的に提案することも期待されます。私自身、国際交流協会の方と話すなかで外国籍県民の災害対応に課題を感じ、解決策を提案し後任につなげたこともあります。想像以上に「やってみたい」が受け入れられるダイナミックな仕事場だと思います。

終日職場にこもっているわけでもありません。業界団体の方と話したり、各地の現場に出向いて意見を交換したりしながら、大局的・政策的な視点で地元の役に立ちたいと考えています。ただ、地元といっても、広島県に接した岩国市から、九州との結びつきが強い下関市まで広く、暮らす人々の立場や考え方も多岐にわたります。学生時代のボランティアで、ある県の全域を選挙カーで回ったときの感想が思い出されました。「いったい、これだけ多くの有権者に応えられる政策なんてあるのだろうか」と。どんなに良いと思える施策でも、全員に納得してもらうことは困難です。それでも地道に対話を重ねることで物事を少しでも良い方向に進めたい。それが私の原動力です。行政職は何かのスペシャリストではありません。けれど、専門家と地域の方など、普段会わない人同士をつなぐことはできますから。

やの・のぶこ●1981年生まれ。京都大学文学部卒業後、山口県職員。岩国健康福祉センター（健康福祉部）、人事課（総務部）、国際課（観光スポーツ文化部）、財政課（総務部）、医療政策課（健康福祉部）、教育政策課（教育庁）を経て、2025年4月より現職。

取材・文／堀水潤一
撮影／島袋智子

2

私の仕事は、~~農家~~です。

地域を担うこと（啓太郎）　お客さんと家族みたいにつながる農家（早紀）

啓太郎 三重の農業法人に10年勤めたのち、米農家として独立するため、妻と千葉の里山に移住しました。運よく田んぼが借りられ、古民家も紹介いただきました。高齢化した農家が多いなか、多少経験のある若手が来たため温かく迎えられました。軽トラやコンバインなども融通いただき感謝しています。

今の私の仕事は米作りが中心。田植えから収穫まで一人でできる規模でやっています。それと害獣駆除も。千葉の農家はキョンという大繁殖した外来動物に困っていて、免許を取得し罠を仕掛けています。役場から捕獲報奨金が出るため家計の足しにもなってます。

早紀 私の仕事は、注文を伺い新米を出荷すること。直販主体なので、家族の

ようなつながりができることが楽しくって。うちのお米を食べて育ち、高校生になったという話も聞けるんです。

以前は介護のパートもしていましたが出産を機に辞めました。その代わり、収穫した作物で何か作ろうと試行錯誤するなか和菓子に可能性を見いだし、近隣のマルシェで販売しています。あんこ炊きから練習を重ね、自分好みに甘さを抑えたところ好評で、ファンも増えました。一緒にお米を買われる方も多く、毎週末各地で出店しています。

啓太郎 キャラの表情など（写真）、見た目がとてもかわいいんです。お米袋もカラフルなオリジナルデザイン。発送時に同封する「結農園新聞」には、イラストや漫画を描くこともあるんです。

早紀 趣味も兼ねてますが、お客さんに喜んでもらいたいのが第一。お米を研ぐ作業って面倒だけど、少しでも気分を明るくしてほしくって。新聞も、私たちのことを知り、コミュニケーションのきっかけにしてほしいからです。

農家として独立してよかったのは、やりようによっては何者にでもなれること。なんたって“和菓子屋さん”にも、“デザイナー”にも、“漫画家”にもなれていますから。好きな時間に好きなことをやってるので楽しくて仕方ありません。

啓太郎 独立すると、失敗はすべて自分たちに返ってきますが、納得はできますよね。米作りも、日々やることだらけですが、「次は何をして、どう世話しよう」ってわくわくします。だから農閑期になると春が待ち遠しくて。

懸案は、周囲の農家の後継者問題です。皆さん受け継いできた田んぼを私たちに託したいんです。その期待に応え地域を担いたいし、この風景を守りたい。それは温かく迎えてくれたことへの恩返しにもなります。ただ、私たちだけでは限界があります。解決策は、新規就農者を1組でも増やすこと。そこでYouTubeも使って自分たちの経験を発信しようと計画中です。家も田んぼもなく、伝手もないところから始めた私たちの経験は参考になるはず。魅力よりも、「生活費はこうで、売り上げはこれくらい。こう工夫すると貯蓄も増える」といった具体を伝えることで不安を払拭し、仲間を増やしていきたいです。

せきや・けいたろう／さき●1980／1989年生まれ。啓太郎さんが勤務する三重県の農業法人に、都内の大学生だった早紀さんがインターンシップに参加したことが二人の出会い。ともに実家は非農家だが、米作りの楽しさや農村の温かさに触れ独立を決意。2015年に千葉県いすみ市に移住し、翌年「結農園」を開業。

取材・文／堀水潤一
撮影／竹内弘真

（株）ヤッホーブルーイング
県内・軽井沢営業ユニット
飯田祐眞さん

3

私の仕事は、~~営業~~です。

↓

地元の仲間の輪をひろげること

「よなよなエール」というクラフトビールをご存知でしょうか。私はその製造元、ヤッホーブルーイングで営業の仕事をしています。茨城出身の私がなぜ長野に本社や醸造所を置くビール会社に就職したか。きっかけは、大学院で、総合型地域スポーツクラブの研究をしていたとき、こんな話を聞いたことです。「欧米で盛んな住民自治のスポーツクラブでは、運動を終えた人々がクラブハウスに集まり、年代に関係なく、おしゃべりに興じる。その中心には決まって地域のビールがある」と。人好き、ビール好きの私は、「ビールには、そんな素敵なつながりを生む力があるのか」と心が躍りました。そし

て、個性的なビールやイベントで多くのファンの心を掴んでいる弊社のことを知りました。大手のビール会社に就職したら、シェアの奪い合いに追われるかもしれませんが、この会社なら地域と関わる仕事ができると思いました。

入社4年目の今は営業部門に所属。コンビニを含む県内全域の小売店や軽井沢地区のホテルを担当し、バイヤーさんに製品を提案したり、勉強会を開いたり、ブランディングやマーケティングにも関わっています。期間限定の新製品を世に出す際は、製造部門とコンセプトをすり合わせ、パッケージデザインについても意見を出し合います。

年間を通して試飲会やフェスなどのイベントも多く、その企画や運営も私の仕事です。つまり、販売して終わりではありません。そのため目標はあっても売り上げノルマはないんです。営業部門のミッションは「クラフトビールで三方楽(たの)し」というもの。三方とは売り手・買い手・世間のことです。私たち自身が楽しみながら、お客様がワクワク楽しめるような体験、例えば、数千人規模の人が集うファンイベント「よなよなエールの超宴(ちょううたげ)」がその代表ですが、エンタメ性のある体験価値を提供し、そのうえで業界や地域を盛り上げ、“仲間”の輪を広げていく仕事だと感じています。

本業以外でも、地域に関わりたいという入社前からの希望は実現しています。入社直後、地元(軽井沢・御代田・佐久)を盛り上げようと、有志スタッフによる「地元プロジェクト」が立ち上がり、私も加わりました。地元の魅力を社員が投稿する写真コンテストを皮切りに今も多くの地域貢献活動をしています。弊社の良いところは、やりたいと手を挙げれば後押ししてくれること。就業時間の2割を、直接業務と関係ないプロジェクト活動に充てていいんです。

プライベートでも、地元の花火大会やカーリング大会などを手伝ってますし、駅前の交流スペースが、夜の部(酒場)を始めてからは、終業後、副業として働いています。そこで知り合った方と仕事につながることもありますが、それが狙いではありません。目的は、真の意味で“町の人”になって、仲間の輪を広げること。いつまでも移住者扱いでは地域を盛り上げることはできませんから。

いいだ・ゆうま●1993年生まれ。筑波大学大学院で、豊かなコミュニティや社会づくりに関心をもち、2021年ヤッホーブルーイング入社。現在、「県内・軽井沢営業ユニット」(別名 軽井沢Cheers!)に所属。同社は「働きがいのある会社」として知られ、自由に意見が言える組織醸成のため雑談朝礼ほかニックネーム制を導入。飯田さんはスタッフや取引先から「ばんだ」の愛称で呼ばれる。

取材・文／堀水潤一
撮影／平山 諭

komatokamo
オーナー
中島満香さん

4

私の仕事は、花屋です。

人と街をつなぐコミュニティ花屋

自分でも不思議ですが、20年近くコンサルティング会社に勤め、今、花屋を経営しています。きっかけは、コロナ禍でリモートワークが続き、働き方や生き方に疑問が生じたこと。好きな花に囲まれたくなり、花卉（かき）市場に足が向いたんです。何とか仕入れられたのですが、まとまった単位でしか購入できず、自宅に飾るには多すぎました。ならば町の人に格安でお分けしようと、自転車に積み近所をウロウロし始めたんです。でも人って、呼び止めてまで物を買わないんですね。そこで、店休日の鞄屋さんの軒先に「ご自由にどうぞ」と処分品が置かれていたのに便乗し、その横で腰を据えたとこ

ろ買い手がつくようになりました。けれど、鞄屋さんのオーナーが戻ってきて平謝り。誠心誠意経緯を説明したところ、毎週末、軒先を使う許可を頂けました。ご好意はそれだけではありません。翌年その〝路地裏花屋〟が軌道に乗ってきたタイミングで、高齢のため鞄屋さんをたたむということで格安で店舗を貸していただけることになったんです。

こうして2022年、念願の実店舗をオープンしました。私の業務は、金曜早朝、市場で一週間分の花を仕入れることから始まります。車いっぱいの花をスタッフと店に運び、水揚げしたり、棘や葉を落としたりして商品棚に並べるまでに数時間。水をこまめに変えることも重労働です。でも、大好きな花に囲まれて過ごす喜びは何物にも代えられません。昔の同僚が店に来ると「別人？」と驚くくらい顔つきも変わったようです。

オーナーとのご縁は続き、内部で行き来できる隣の店舗も使えることになりました。ただ、花屋を拡張しても大きな利益は見込めません。そこで、花のワークショップや料理教室などのイベントも実施できる、地域に開かれたカフェを開業しました。片隅では有機野菜も販売しています。ですから今、花屋で、八百屋で、カフェで、コミュニティスペースでもある変わった店を運営していることに。コンサルティングの仕事も続けています。私の専門は公共事業に民間の力を巻き込むこと。会社員時代のような大規模プロジェクトではなく、「地域のことは地域の人で」をテーマに、地元の企業やNPOを自治体の地域づくりに活かしたい。その点、花屋もカフェも、人と街をつなぐコミュニティハブとしての機能も期待してるんです。初対面の方に「官民連携のコンサルです」と自己紹介しても「何それ」状態ですが、「花屋です。コンサルもしてます」と言うと興味津々。花は心のバリアを外す素晴らしいツールなんですよね。

私は、計画的に花屋になったわけではありません。生き方を模索するなか、偶然の出会いも活かし、ピースがはまるように今の形にたどりつきました。時おり本業が何かわからなくなりますが、人間って多面的な生き物。なので仕事も多面的でいいかなって。そんな花屋もあることを高校生に知ってほしいです。

なかしま・みか●1975年生まれ。筑波大学大学院修了後、建設技術研究所およびPwCアドバイザリー合同会社に勤務し、公共事業の計画立案や官民連携のアドバイザー業務に従事。2021年に“路地裏花屋”を開始し、2022年にJR駒込駅近くに実店舗「komatokamo」をオープン。さらに2024年には地域の拠点となるべくカフェ「Farm to Home」を隣で開業。

取材・文／堀水潤一
撮影／平山 諭

スマートニュース(株)
ソフトウェアエンジニア
峯田初音さん

5

私の仕事は、~~ソフトウェアエンジニア~~です。

パソコン1つで世界を創ること

世界中のさまざまなメディアから情報を集めてユーザーに届けるニュースアプリ『SmartNews(スマートニュース)』のシステム開発に携わっています。なかでも有料会員向けの記事について、記事の収集・分析・分類から、システムの設計、プログラミング、サービスの運用テスト・公開まで、いわゆる「ソフトウェアシステム」の一連の開発業務を担当しています。入社以来、オフィスとリモートのハイブリッドワークで、会議はオンライン、社内コミュニケーションはチャットが中心です。また、エンジニアは多国籍で、主に英語と日本語を使っています。

5

仕事をするうえでは、周囲とのコミュニケーションが不可欠です。企画の立案・管理を行う「プロダクトマネージャー」とタッグを組み、どのような目的のために何を実現したいのか、そのためにはどのようなシステムが必要か、どのような仕様にすれば将来的なニーズにも対応できるか…といったことを詰めていきます。また、現在担当しているプロジェクトでは、エンジニアのまとめ役「テックリード」を務め、メンバーの合意をとりながらチームで開発を進めています。こうした業務を円滑に行うために気をつけているのが、相手への伝え方です。良くも悪くもエンジニアはストレートな表現をしがち。例えば、「これって意味あるんですか？」とズバッと言われたら、戸惑う人もいるはずです。フラットだけど相手への配慮を忘れない、そんな関係性づくりを意識しています。

私はものづくりが好きで、システムを作ったりプログラムを書いたりすることが楽しくて、エンジニアになりました。私にとって仕事は育成ゲームのような感覚で、努力をしてスキルや経験値が身につくと、次のステージに上がる…というプロセスに面白さを感じてきました。一方、エンジニアとして働くなかで、楽しいだけでなく、作った先にある目的に共感できる仕事がしたいと考えるようになりました。そして、現在の会社に転職。決め手は、「世界中の良質な情報を必要な人に送り届ける」という会社のミッションでした。自分が開発に携わったサービスやツールを使った人から、役立った、便利になったと言われると嬉しいですが、その先にある新しい価値や世界の創造にこそエンジニアの仕事の魅力があると感じています。

小学生の頃からパソコンを触るのが好きで、ガラケー用の着メロを自作したことも。「パソコンとインターネットがあればなんでもできる！」というワクワク感が、エンジニアとしての原体験になっています。エンジニアの間には、所属する組織を越え連帯感があり、情報や技術はオープンにしてみんなで共有しよう、みんなで世の中をより良くしていこうという空気があります。パソコンとインターネットがあればなんでもできるというのは決して大げさではなく、世界を変えることだってできるし、自分もその一員でありたい。そう思っています。

みねた・はつね●1997年生まれ。京都大学工学部情報学科卒業。中学時代から開発系の仕事に憧れる。大学では情報学の理論を学び、アルバイトを通してプログラミングの知識・技術を習得。ソフトウェアエンジニアとして就職し、2023年にスマートニュース（株）に転職する。

取材・文／笹原風花
撮影／竹内弘真

Five Star
訪問看護・栄養管理Station
代表取締役・管理者・看護師
朝倉之基さん

6

私の仕事は、看護師です。

自分で道を切り拓く看護師

看護師として大学病院で18年間勤務したのち独立し、訪問看護ステーションを立ち上げました。現在は、現場でスタッフが判断に迷った際に指示を出したり、うまく処置ができないときにサポートに入ったりと、現場で働く看護師たちをバックアップしながら事業所の経営をしています。

訪問看護に初めて興味をもったのは、看護学生時代のこと。実習で在宅看護の現場に伺い、人工呼吸器をつけて生活されている方を見て、「医療現場＝病院」という固定観念が覆されました。同時に、患者さんや家族の暮らしに

密着した看護があることを知り、自分もいつかやってみたいと惹かれました。

卒業後は、医療の最前線で看護師としての経験を積みたいと考え、大学病院に就職。神経内科、がん治療センター、集中治療室などを経験し、中間管理職も務めました。忙しい日々を送っていましたが、コロナ禍で会議や研修といった業務がなくなり時間ができたことで、自分の今後のキャリアについて考えるように。ふと浮かんだのが、「訪問看護をやってみたい」という学生時代の純粋な思いでした。しかし、18年間積み上げたキャリアもあり、訪問看護ステーションで新人スタッフとして働くという選択肢は現実的ではなく、それならば働く場所を自分でつくろうと起業を決めました。経営の知識も身近に起業の事例もなく、まさに手探り状態でしたが、一つひとつ壁を乗り越えていきました。

病院勤務時代は、目の前の患者さんをより良くすることが、自分にとっての課題でありミッションでした。それが、経営する立場になって変わりました。利用者さんやご家族のことを第一に考えるのは同じですが、その先にある社会課題に目が向くようになり、会社の存在意義を考えるようになったんです。誰もが適切な場所で適切なケアを受けられるようにするためには、地域の医療インフラの整備が不可欠です。この課題に対して、「訪問看護」というリソースを提供することが私たちの役目です。そして、私たちが事業活動を通して目指しているのは、住民が安心して暮らせるまち、住みたくなるまちです。そんなまちにするには、医療の前段階として健康を保つための介入も必要だよね、高齢者だけでなく次世代をつくる子どもたちへのサポートも大事だよね…と課題への関心はどんどん広がっていきました。そして、高齢化の進む団地のまちおこしなどに携わるなかで、さまざまな人と出会い、つながりが生まれ、志を共にする仲間が増えていきました。

今、私の目の前には、学生時代にも病院勤務時代にも想像していなかった世界が広がっています。今後やりたいことの一つが、子ども食堂を軸にした「まちの保健室」をつくること。看護師や管理栄養士に気軽に健康相談ができて、夜は高齢者向けの居酒屋にもなる、そんな場所を構想しています。

あさくら・ゆきもと●1981年生まれ。認定看護管理者。栄養治療専門療法士。NST専門療法士。東海大学医学部付属病院勤務を経て、2021年に訪問看護ステーションを起業。現在は看護師のほか理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士が所属し、在宅でのQOLを高めるトータルケアの提供を目指している。

取材・文／笹原風花
撮影／島袋智子

(株)アトラエ
シニアデータサイエンティスト
杉山 聡さん

7

私の仕事は、~~データサイエンティスト~~です。

今日より明日を良くすること

私はデータサイエンティストとしてIT系企業に勤務し、主にデータ分析と分析を使った機能開発に取り組んでいます。一例を挙げると、自社で運営している転職サイト『Green』の検索機能について、どのような単語が誰によってどのくらい検索されているのかといったデータを基に、検索の性能を優先的に上げるべき領域を洗い出し、性能を上げるためのプログラムを作る、といったことをやっています。また、会社のAI戦略策定を担い、最新AI技術や業界の動向についての情報収集や未来予測を行い、それを社内に周知するという仕事もしています。

7

データを扱ううえで大事なのが、「データを使って何をするか」です。顧客のニーズはどこにあるか。ニーズに対してどのような価値が提供できるか。そのためにはどのようなデータと分析が必要か。その実現のためにはどのような人材を集め、どのような会社とコラボすべきか。データサイエンティストには、こうしたマーケティングや事業開発の視点やセンスが求められます。理系の職業という印象が強いかもしれませんが、情報系の基礎知識は必須とはいえ、文系出身のデータサイエンティストも多く活躍しています。

データを扱う人間として心掛けていることが2つあります。一つは、倫理的に誇れる仕事をすることです。データは悪用しようと思えばいくらでもできます。怖いのが、悪意なき歪みです。誰か・何かのために良い結果を出したいと思うが故に恣意的な分析をしてしまう…ということが起こり得るのです。こうしたことのないよう、忠実にまっすぐに業務を遂行することを肝に銘じています。

もう一つが、データの分析に自分なりの色を入れることです。顧客のニーズ、データの傾向、分析の手法などからベストな道を探っていくのですが、そこにデータサイエンティストの個性が出るんです。私の場合は、「この分析手法はこういうタイプだな」と性格を汲み取り、課題に合う手法を編み出す感覚です。学校の先生が生徒に合わせて教える内容や教え方を変えるように、料理人が素材に合わせて調理法や味付けをアレンジするように、正解がないからこそ自分らしさを加えることを意識しています。この2つは一見すると矛盾するようですが、両立するところにデータサイエンスの面白さがあるのかもしれません。

今、世界はものすごいスピードで書き換わっています。そして、ITは次の世界をつくる中心勢力の一つです。自分はその領域に身を置いて、今日より明日、明日より明後日をより良くする仕事をしているのだと自負しています。一方、あまりの変化の速さと勢いに、脅威を感じる自分もいます。変わらざるを得ない状況のなか、大事なのは変化を受け入れる素直さと変わる意志をもつこと。これを胸に刻み、これからも新しいことを学び続けていきたいです。

すぎやま・さとし●1990年生まれ。数学者を目指して大学院博士課程で学ぶも、世の中に対して出す価値を大きくしたい、今しかできないことをしたいと考え、当時スタートアップだった（株）アトラエに入社。マーケティング職を経て、入社3年目に社内初のデータサイエンティストとなる。

取材・文／笹原風花
撮影／平山 諭

京急電鉄(株)鉄道本部
施設部 川崎保線区
機械軌道2班 機械軌道係
森﨑昌悟さん

8

私の仕事は、~~鉄道作業員~~です。

人知れずあたりまえをつくること

京急電鉄の施設部・川崎保線区に所属し、保線作業を担っています。「保線」とは、線路のメンテナンスのこと。線路は電車の走行により曲がったり沈み込んだりし、放っておくと電車の快適な乗り心地を損ない、安全な走行にも支障を及ぼす恐れさえ生じます。そうならないよう、線路を正しい状態に保つために行うのが保線作業です。

保線区には、線路状態に異常がないかを検査する「検査班」、主に線路を保守する「保線班」、保守用車で保線作業を行う「機械軌道班」があります。私は機械軌道班に所属し、作業現場までレールや砕石(線路の下に敷く石)な

どを運ぶ車両、レールを削る車両、線路の歪みを直す車両など、10種類ほどある保守用車を運転・操作しています。

なかでも操作が難しいのが、マルチプルタイタンパー、通称「マルタイ」と呼ばれる車両です。マルタイは、縦方向・横方向に歪んでしまった線路のまくら木（線路の下に敷く部材）を支えている砕石部分をつき固めることなどで、歪みを整正します。いずれもミリ単位で整正することが求められ、作業には高度な技術と集中力が必要です。一歩間違えば線路を破壊しかねない、リスクを伴う作業でもあります。自動モードでも操縦できるのですが、マニュアルモードで微調整したほうが線路状態が長く保たれ、操作の難易度は高いですがそこはこだわっています。

私は工業高校の機械科出身です。通学で使っていた京急電車の車窓から、線路上にいる作業員の姿を見て、どういう仕事をしているのだろうと興味をもったのがきっかけ。学校の先生に聞いたり調べたりするなかで保線の仕事を知り、現場作業がやりたい自分に合っていると感じ、この仕事に就きました。

実際に働きはじめて実感したことは、仕事の幅の広さとディープさです。基本は夜間工事で、始発までに作業を終えるという絶対的な使命の下、チームにて協働する真剣勝負の日々。事務作業から重たい部品を運ぶ作業まで「こんなことまでするのか」という業務も多く、いかに自分が何も知らずに就職したかを思い知りました。同時に、保線の現場作業が面白そうだと思った感覚は間違っていなかったことも実感しました。同じ現場でも日によって業務内容が違い、判断力や応用力が試されるシーンも多く、毎日が刺激的で飽きることがありません。努力を重ねることでできることがどんどん増えていく感覚は、やりがいにもつながっています。

不具合が起こる前に、先回りして整備をすることが私たち保線作業員の役目。存在に気づかれないよう裏の世界で輝く、影武者的な存在です。みんなが知らないところでみんなが知らない働きをして、電車に安全・快適に乗れるという「あたりまえ」をつくる。無事に作業を終えると、「俺ら、最高でしょ!」という誇りと大きな達成感に包まれます。

もりさき・しょうご●1998年生まれ。神奈川県立横須賀工業高校卒業。2017年に京急電鉄（株）に入社。現在、機械軌道2班に所属し、マルチプルタイタンパーをはじめとする保守用車を使い保線作業にあたる。現在はトロリ指揮者も務め、後輩の育成にもあたる。

取材・文／笹原風花
撮影／竹内弘真

誌上ワークショップ

「こういうもの」の枠を外して職業を捉え直す

知らず知らずのうちに、私たちは凝り固まった認識の枠組みの中で、職業を捉えているのかもしれません。
その「こういうもの」の枠を外してみたら、よく知ったはずの職業でも、また違った“顔”が見えてくるのでは?
編集工学研究所の安藤昭子さんと先生方4人が、ワークを交えながら意見交換した様子をレポートします。

取材・文／塚田智恵美　撮影／平山 諭

ファシリテーター

あんどう・あきこ●編集工学研究所・代表取締役社長。2010年に編集工学研究所に入社。企業の人材開発や理念・ヴィジョン設計、教育プログラム開発や大学図書館改編など、多領域にわたる課題解決や価値創造の方法を「編集工学」を用いて開発・支援している。

ワークショップの参考図書

問いの編集力　（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

なぜ「問う」ことは難しいのか? 大人になって問えなくなるとしたら、何が邪魔をしているのか? 「問い」はどこからどうやって生まれてくるのか? これらの問いの発生に関するメカニズムについて、編集工学の視点で探究する一冊です。

Work 1

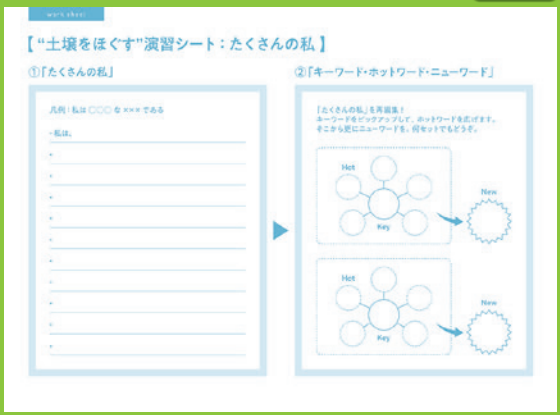
何より見方が固まりがちなのは自分像。多面的な「私」を知る

次のルールで「たくさんの私」を書き出しましょう

「私は○○○な×××である」という構文を、最低20個、できれば30個。「×××」は名詞、「○○○」はそれを修飾する言葉。いずれも、同じものを2回使ってはいけない。

高校生でも、「私はこういう人間だから」「どうせ私はこの程度だから」と口にする生徒さんがいるかもしれません。無意識のうちに、自分というものへの認識が狭まり固まっていくのです。まずはそこからほぐしてみましょう。

ダウンロード可



ワークシートはダウンロードしてご使用いただけます。

"たった一つの名前"に縛られているところから脱する

授業内容や進路指導などそれぞれに異なる特色をもつ高校からお集まりいただいた、4名の先生方を前に、ファシリテーターの安藤さんから「職業について考える前に、私たちのものの見方を、柔らかくほぐすところから始めたい」と話があった。そこで冒頭では、多面的な自分を知るためのワークをやってみることに。「私は○○○な×××である」という構文に当てはめて、さまざまな自分を言葉にしていく。

「自分を説明する名詞を考えてみると、まずは『教員』『親（子）』など、社会的な属性を表す言葉が思い浮かぶかもしれません。でも、そうした表層的な属性情報を出し切ると、自分を何かに見立てざるをえなくなる。そこからが、このワークの面白いところです。なんとも言葉にしがたい自分らしさが、顔を出し始めます」（安藤さん）

「最低20個書く」というお題に、最初は戸惑いの表情を見せた先生方も、黙々と筆を進めていく。書かれたフレーズを発表してもらうと、後半になるにつれて、自分を表す言葉がどんどんユニークになっていくのがわかる。

「私はにんじんの嫌いなうさぎである」（見た目で決めつけられがちな性格と実際の自分が

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.454）

思いもよらない自分の“らしさ”が連想した言葉の中に見つかる

違うように感じるから)、「手先の不器用な大工である」(ものごとの構造が好きだが、自分で組み立てることは苦手だから)と、“矛盾”する自分を発見し、表現した先生もいた。

こうして出てきた「たくさんの私」を再び編集し、新しい自分を表現するキャッチフレーズを考えることに。ポイントは「その言葉を考えるとワクワクする、きもちいい、といった感覚を大切に、自由に言葉を連想していく」ことだと安藤さんは語る。先生方からは「知識の酒」「つなぐ・つながる田舎暮らし」など、その方の素顔がうかがえるような、ユニークなキャッチフレーズがたくさん飛び出した。

安藤さんは、現在放送中の大河ドラマの主人公・蔦屋重三郎が、狂歌師としては別の名を名乗っていたことを例に出しながら、「現代を生きる私たちは、自分自身の本当の名前というものに少し縛られすぎているところもあるのではないでしょうか。それが自分のものの見方や、想像力を狭めることにもつながっているかもしれない」と語る。高校生でも「私はこういう人間」と無意識に決めつけ、進路の選択肢を狭めている生徒がいるかもしれない。「私たちには本来、たくさんの顔があります。“整合性のとれた一種類の私”という幻想から脱して、もっと自由にあそびをもたせてみる。すると、それまで気づかなかった、新しい自分が表に出てくるかもしれませんね」(安藤さん)

Work 2

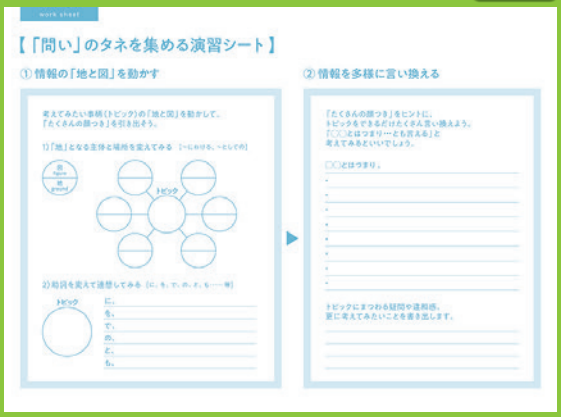
よく知っているはずの“教員”を改めて説明するなら？ 多面的に職業を捉える

「地」と「図」を動かして“教員”を言い換えましょう

～にとって、～におけるの「～」にあたる主体や場所（地）を動かして、その文脈で教員がもつ意味（図）を、多様に表現してみる。

マグカップはお店（地）にあれば商品（図）ですが、ゴミ捨て場（地）にあれば燃えないゴミ（図）です。あらゆる情報には、常にたくさんの顔つきがあります。誰が、どこから、どのように見るか。視点を動かして“教員”を見てみましょう。

ダウンロード可



ワークシートはダウンロードしてご使用いただけます。

向き合う生徒によって変わる教員のもつ意味や役割

情報の多面性とは、さまざまな文脈（地）の上に展開される、たくさんの意味（図）のバリエーションのことだと安藤さんは語る。「教員に関わる主体（生徒や保護者など）や、場所（学校や社会など）を意識的に切り替えることで、それまで見えていなかった教員というものの側面が見えてくるのでは？」（安藤さん）

そこで「地」を自由に変えながら、その「地」において教員というものがどのような意味をもつかを書き出してみることに。

生徒にとって、保護者にとって、学校において、地域において、社会において…と、「地」を変えるごとに、見えてくる教員の顔つきが変わる。例えば、自由にやりたい生徒にとって、教員は「看守」のような存在にもなりかねないが、みずから考えを深めたい生徒にとって、教員は「コーチ」である、というような回答も挙がった。向き合う生徒によって、教員の役割やもつ意味も変わる、ということだろうか。

ある先生は、社会という「地」において、教員とは「一定の装置」である、と書いた。どういうことかと詳しく聞いてみると、日本の公立小学校を取り上げて話題をよんだドキュメンタリー映画（『小学校～それは小さな社会～』）の話や、過去に遭遇した生活指導の例

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.454）

「教員という職業」に これだけ異なる顔つきがあること

を出しながら、「日本社会において公教育には、集団の中での協調性を育む側面がある。もちろんそのことの良い面もわかっているが、別の面から見ると、教員が『日本社会にうまく適応する人物をつくる、装置のようなもの』だと思えることもある」と語った。

一方、同じく社会という「地」を設定して、教員とは「持続可能な社会の形成者」だと捉えた先生もいる。どちらの回答も、現場で日々働かれている先生の、これまでの経験による実感がこもったものだった。

（先生方から挙がった回答の一部を、次ページの図に抜粋しています）

ここまで、意識的に文脈を変えながら教員のもつ意味を考えてきた。さまざまな側面で教員がどのような役割を果たしているか、言語化してきたところで、改めて「教員とは、つまり～とも言える」と、教員という職業を言い換えてみることに。

先生方からは「教員とは、生徒が新しい世界につながる窓とも言える」「教員とは、まだ知らない自分らしさを引き出すファシリテーターとも言える」などと、さまざまな視点を取り入れた回答が挙がった。ほかの先生の発言を聞いて「教員という仕事に、これほどまでにさまざまな意味や役割があると思わなかった。もはや教員とは日本のことであり、未来そのもの

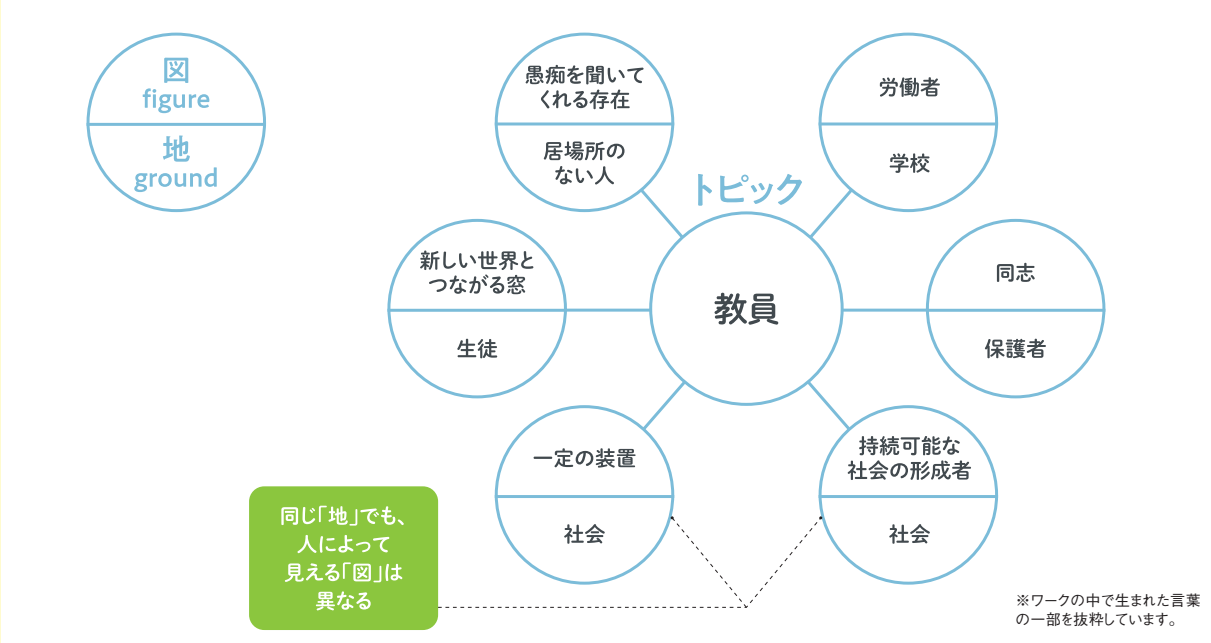
のであるとも思えてくる」と語った先生もいた。

先生方の回答を聞いて、安藤さんは「私が一人の生徒だったときには見えなかった、教員の〝別の顔〟がたくさん見えました。生徒たちにとって、地域にとって、社会にとって、教員が果たしている役割はそれぞれ異なり、これだけ幅があるのですね。いち市民としては、希望を感じる時間でした」と語った。

ワークを通じてうかがえた人柄や仕事観

ここまでの2つのワークを終えて、先生方からは「教員歴はそこそこあると思っていたが、自分が想像もしなかった教員像が皆さんから出てくることに驚いた」「個人の経験や個性によって、職業をどう捉えているかが違う」といった声が挙がる。参加された先生方は、この日が初対面だったが「皆さんが普段、教員として、どのように働かれているかが、ありありと想像できるようだ」「ほかの先生方の回

“教員”とはつまり、何か? 意図的に見方を変えて捉えてみる



“教員”とはつまり…?

- 生徒が新しい世界につながる窓
- まだ知らない自分らしさを引き出すファシリテーター
- 教材開発者と阿吽の呼吸で授業を創り出す者
- 社会が求める人材をつくりあげて世に出す装置
- 日本であり未来

答を聞いているだけで、胸が熱くなる」という声もあった。それぞれに抱く教員という職業への思い、人柄、仕事観…。普段同じ職場で働いていてもなかなか見えない顔が、ワークを通じて透けて見えてくるようだった。

「学校の教員というと、世間では教科指導や生活指導のイメージが強いと思う。生徒たちからも〝指導する者〟としての顔しか、なかなか見えないかもしれない。しかし、ここに集まった4名だけでも、これほどまでに教員というものをどう捉えるかに幅がある。生徒たちには自分だけでなく、さまざまな教員に触れて育ってほしいと改めて感じた」と語った先生もいた。

自分にたくさんの顔があるように、教員という職業にもたくさんの顔つきがある。ある面ではジレンマも抱えながら、同時に、誰かにとって欠かせない役割を担っている。それはきっと教員だけではないだろう。ほかのあらゆる職業にも、表からはなかなか見えない顔つきがある。

職業がもつ多面性、働くことの多様さと、高校現場

職業観育成の授業や職業体験での悩みはありますか？これから生徒に伝えていきたいことは？

ここまでのワークでは「私」と「教員」を題材に、見方や捉え方を柔らかく広げてきました。このディスカッションでは、高校現場における職業観育成の授業について、さまざまな視点からお話できればと思います。

数字で測れる基準だけではない

「自分」にも「職業」にも、さまざまな顔があり、一つの視点からは捉えきれないような多様な側面をもっている。社会に出たことのない生徒たちが、その多様さや豊かさを、どれだけ想像できるだろうか。ここからは安藤さんから問いを投げかけてもらいながら、先生方が日頃から職業観育成の授業や職業体験で課題に感じていること、率直な悩みなどを、自由に話し合っていただいた。

特別活動部長として探究の授業も担当する金子先生は、生徒たちが給与や待遇などの見えやすい部分に振り回されがちなことに課題を感じているという。

「探究活動を通じて、自分の興味や関心と、進学先で学びたいテーマがつながっていく生徒もいます。ただ、卒業後就職を希望する生徒は、求人票を見て数字で測れる部分を比較して選びがち。長い人生の中で『働く』ということを考えるとき、わかりやすい数字や職名だけでなく、『どう生きたいか』という自分なりの視点をもって考えてほしいです」（金子先生）

商業高校に勤務し、生徒の半分が高校卒業後に就職するという髙林先生も「休暇日数などの待遇、人間関係をうまくやれるかといった環境面に目が行きがちです」と頷く。

自分は何に心を動かされるのか、
何を大切に生きるのか。
外側の見えやすい部分に
振り回されないで、
職業を選んで
ほしいですが…。

金子容子先生

駒川先生は、進学指導をした生徒から「大学に入学するための話ではなく、人生において大学はどんな場所なのか、という話を先生から聞きたかった」と言われた経験を紹介しながら、進学や就職をゴールにした指導で良いのかと問いかける。さまざまな制約があるなかで、進学という指標における効率性や、体験授業を安全に成立させることが優先されてしまうときもある。「職業体験で行く先が、世の仕事のすべてではない。大人たちが必死で探してきた受け入れ先を生徒に割り振るだけでは、生徒たちの心が震えるような体験につながらないのではと、自問自答することもあります」（駒川先生）

一方、工業高校に勤務し、就職する生徒への指導をすることが多い栗山先生からは「働くうえでやりがいは大切だが、まだ働いたことのない生徒たちに『やりがいを考えて職業選択をして』と言うのは、なかなか難しいもの。就職活動時点では、比較できる数字や情報をしっかり見ていくことも大切では」という意見も挙がる。

職業をみずから創り出す時代に
「雇われて働く」ための力だけを
教えていて良いのでしょうか。
私はもっと
「働くことの楽しさ」を
伝えたいです。

髙林直人先生

同じ職業でも「やりがい」は
人それぞれです。
働いたことのない生徒たちが
「何のために働くか」を
想像するのは、
なかなか難しい…。

栗山博樹先生

職業を選んだ、その「先」で みずから動き出せる力を

職業を取り巻く社会の変化も激しい昨今。髙林先生は、「商業高校の授業で扱う接客や簿記といった内容は、以前なら職業選択に直結するものでした。しかしAIの出現によって、どんどん仕事内容が変わるのが当たり前になっていく。だからこそ、高校時点でどの職業を選ぶか以上に、選んだ先でキャリアチェンジをしたいと思ったら、自分で動き出せる力をもっていることが大切になるのでは」と語る。金子先生も「動き出そうというとき、外側の価値に惑わされない選択の軸を、自分の中で育てていくこと」の大切さを指摘。「探究の授業の最初のステップとして『自分を知る』ことを掲げています。自分を肯定的に捉えて、自分にとっての幸せを理解するところから、探究が始まると考えている。職業選択も同じで、『何をしているときに幸せを感じるか』『社会にどう貢献したいか』というような自分の軸が見えてくると、職業

への見方も一段階深まり、自分の人生を主体的に生きられるようになるのでは」（金子先生）

ここで安藤さんが「わかりやすい外側の価値に惑わされずに、世にある職業を見るというのは、大人にとっても大切なこと」と話し、「その〝みずから立ち止まり考える〟力を育てるためには、どんなことが大切なのか」と問いを投げかける。

馳川先生は「授業に、あらかじめ余白を織り込んでおくことではないでしょうか」と回答。「例えば一見、暇そうでゲームばかりしている生徒がいても、それは『自分の心が動くこと、やりたいことが見つからない』という状態かもしれない。それなのに『暇そうだから』とやるべきことを課してばかりいては、自分自身についてじっくり振り返る機会がなかなかもてません。生徒が自由に感じ、気づき、自分について考えることができるような余白を、授業のあらゆる場面でデザインしておくことが、結果として、生徒たちのみずから立ち止まり考える力を育んでいくのでは」（馳川先生）

職業選択は「働き方」ひいては
「生き方」選択でもあります。
だからこそ急かさず、
効率を求めず、
授業に意図的に余白を
取り入れたいです。

馳川祐子先生

職業の変化する時代に一生考え続ける「働く意味」

髙林先生からは、技術革新が起こり、新しい職業がどんどん生まれていく時代に「どこかの企業に雇われて働く」ための力だけを教えていて良いのか、という問題提起がされる。「職業観育成の授業は、ともすれば、職業を社会の中の〝枠〟のように捉え、どうすればその枠に生徒を当てはめられるかという指導になりかねない。すでにある職業名のリストから『どれにしようかな』と選ぶことだけが〝職業選択〟ではないと知ってほしい。そのためには、人それぞれに異なる、働くことの楽しさを、もっと伝えていきたいです」（髙林先生）

職業は、決まった〝枠〟ではない。先生方が多様に教員像を言い換えたように、人それぞれにその職業に抱く意味や役割は違う。教員は、生徒にとって最も身近な職業の一つだが、ワークで出てきたようなそれぞれの思いに生徒が触れる機会はなかなかないと、先生方は言う。

またワーク中には、教員という職業が「装置」に思えてジレンマを感じることがある、という発言もあった。職業に対するこうした自己批判的な意見を、生徒が聞く機会はどれだけあるだろうか。やりがいや意義など仕事の良い面ばかりが取り上げられがちだが「ジレンマを抱えながらも、どのようにその職業に就いているか」という姿勢からも、生徒たちは何かのヒントを見出すかもしれない。

栗山先生は「そもそも今日のように、さまざまな側面から職業を捉える場が、学校にあってもいい」と話す。「時間の制約があるなかでどのようにその機会をつくるかは難しいところですが、職業とは何か、仕事とは何かということは、私たちも一生考え続けるようなテーマ。なかなか答えが出ないものだということは大前提として、生徒たちにも問いかけてみたい」と語った。

Looking back

ワークショップを振り返って

「職業観育成」の、次の一歩を考える

職業名ではなく働く喜びを

今日参加して、仕事とは単にお金を稼ぐ手段ではなく、遊びであり、自己成長であり、社会貢献であると感じました。職業観育成というと、とかく今ある職業名や企業名を伝えることに結びついてしまいがちです。でももっと根源的なこと、例えば「自分が得意なことで、誰かから求められる」場面や「誰かの役に立てると嬉しい」という喜びをつくることが、生徒たちの職業観育成の第一歩になるのではないでしょうか。（髙林先生）

「生きざま」としての職業

いい大学へ進学し、いい会社に入れば幸せになれるという神話が崩れ、生徒たちも探究の授業を通じて「勉強ができるだけでは幸せになれない」と感じ取っているように思います。探究とはまさに、その人の「生きざま」を表している。あなたはこれまで何に関心をもってきたのか、これからどんなことに心を寄せて生きていくのか。その視点は、世の職業を見つめるうえでも大切にしていきたいと、今日改めて感じました。（馳川先生）

「自分で感じ、考える」こと

一つの言葉で括るのではなく、あえて別の言葉で表現することで、違う方向から職業を見ることができたのが面白かったです。高校に限ったことではないですが、学校の中では、時間的制約のなかで先回りして教員が誘導してしまい、それが生徒たちの自分で決める機会を奪っているのではと葛藤することもあります。多様な生き方を知り、さまざまな職業観に触れる機会と、生徒たちが自分で感じ、自分で考える時間を大切にしたいと感じました。（金子先生）

教員という職業の楽しさを再確認

普段、自分の職業についてさまざまな側面から考えてみる機会はなく、皆さんの言葉を聞きながら、教員とは楽しい職業なのだと改めて感じました。多様な視点から職業を捉えることで、仕事の本質がわかる。しかし現実は、就職活動のスケジュールが決まっており、それに間に合うように職業選択を促さざるをえない面もあります。そのなかでも、生徒たちが職業について知る視点を広げていけるよう、考え続けたいです。（栗山先生）

一人の人間としての言葉を交わしあう場を

教員という職業一つとっても、先生方の個人的な経験をふまえると、多様な表現で言い換えることができる。「教員」としてではなく、一人の「人間」としての実感を言葉にしてくださったと感じます。一つの職業名だけでは簡単に括れない、人間としてのリアルな働く像を、どのようにして生徒たちに伝えていくか。現実的には、時間の制約もあり、学校でこのような場を設けるのはなかなか難しいかもしれません。ただし今日、先生方がお話しくださったような、働く一人の人間としての痛みや葛藤、やりがい、喜びに触れることは、まだ社会に出たことのない生徒たちにとって、むしろ「希望」になるのではないでしょうか。給与や待遇といった外側の物差しでは測れない、働く人間の生身の言葉が、教室で、職員室で、交わされていること。大人たちが「ある職業像」に当てはまらない感情をもち、それぞれ異なる意味を見出し、それを言葉で交わし合っているということ。それこそが、社会に出ることに漠然と不安を抱く生徒さんたちへの、何よりのエールになるのではないかと感じました。

「自分」と「働く」を重ねる高校事例

型にはまらない職業観を育成するために、各校ではどのような取組を行っているでしょうか。
生徒が「働く」を自分ごととして捉えて将来に向かえるよう、
学校外でのリアルな体験や活動を充実させている3校の事例をご紹介します。

Case 1 2040年の未来を思い描き、「問い」を磨いて臨む探究型インターンシップ

高崎北高校（群馬・県立）

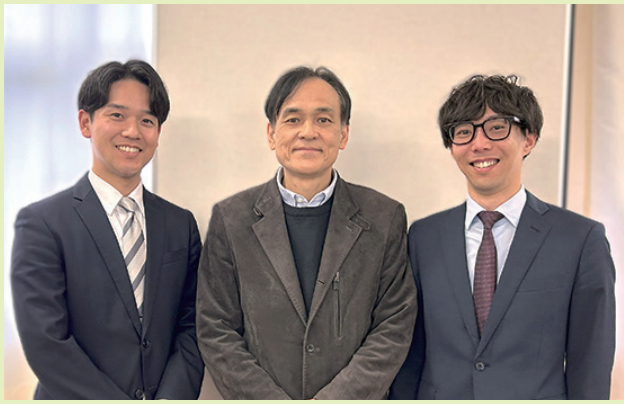
学校データ 1979年創立／単位制普通科／生徒数710人（男子380人・女子330人）／2003年群馬県初の進学重視型単位制高校に。8割以上の生徒が国公立大学進学を目指している。

コンセプトは「仕事の未来を探究する」

進学重視型単位制高校の高崎北高校は、1年次に全員参加による探究型のインターンシップを実施している。

同校は5年前より、総合的な探究の時間にて「Will：自分の興味・関心」「Needs：地域社会・周りの課題や必要あること」「Academic：学問のつながり」の3要素を核とする3年間の探究プログラムを展開している。1年次は「自分を知る・学びを知る・社会を知る」が目標で、インターンシップはその中心的な活動だ。「2年次での探究活動につながる重要な第一歩」と、あらぎ探究推進部長・志村克樹先生は話す。

同校のインターンシップのコンセプトは「2040年の仕事の未来を探究する」。生徒が働くことになる社会をイメージしながら、興味のある仕事の未来について課題と仮説を設定し、実際の職場で仮説を検証する。



写真左から、あらぎ探究推進部の吉永明生先生、部長・志村克樹先生、森田直樹先生。

「自分なりの問いをもって取り組む点が、中学校で行う職場体験とは大きく異なります。単にその仕事の内容ややりがいを知るだけでなく、

取材・文／藤崎雅子

表現力、課題設定能力・仮説検証能力・コミュニケーション力、キャリア意識の育成を目指しています（図1）」（志村先生）

インターンシップ先の約6割が生徒による開拓

11月のインターンシップに向けた準備は1学期から始まる。最初の活動は、各自のWillに基づいたインターンシップ先を決めることだ。生徒は、学校が開拓したリストから選定するか、生徒自身で新規開拓する。2つの方法に優劣はつけていない。重視しているのは、Willに基づいて主体的に決めることだ。そもそもどんな業界や企業があるのかを知らない生徒が多いため、企業情報データベースや経済団体のWebサイトなどを活用して企業調べから始める。

「生徒には先輩の実績を紹介し、自由に決めてよいことを伝えます。『先輩がやっているのだから自分にもできるはず』という意識になり、『こんなところに行ってみたい』と目を輝かせて探すようになります」（吉永明生先生）

そのなかで自己開拓の数は年々増加。2024年度は協力事業所162件のうち自己開拓は約6割。東京や静岡、広島など県外の企業も開拓した。

そして、協力事業所へのアポイントメントは、学校が作成した共通の実施要項を用いて、生徒が直接行う。162件すべてを集めた事前説明会は現実的ではないため、教員による5分程度の趣旨説明動画を作成し、その視聴を通じ、目線合わせを行っている。

図1 インターンシップを通して育成したい資質・能力

1. 2040年のインターンシップ先の仕事の未来をプレゼンテーションできるようになろう【表現力】
2. 自分なりの問いを立てられるようになり、インターンシップ中のインタビューで検証できるようになろう【課題設定能力・仮説検証能力・コミュニケーション力】
3. 「学びたいこと（興味・関心）」と「仕事」とのつながりをイメージできるようになろう【キャリア意識】

図2 探究型インターンシップ日誌

ダウンロード可

問いづくりやインタビュー質問事項の整理などの事前ワーク、当日の記録シート、ルーブリックなどを収録。

企業のWill・Needsも踏まえ自分の問いをつくる

次に、2040年の仕事の未来についての「問い」の設定に取り組む。「どんな問いをもって臨むかでインターンシップでの活動内容が変わってくる」と吉永先生。その重要性は生徒に繰り返し伝え、意識づけているという。

問いづくりの起点には、「自分のWill：そのイ

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.454）

ンターンシップ先に決めた想い・理由」「企業のWill：その企業の理念や社会的価値」「企業のNeeds：その企業が社会から求められていること」の3つを置いている。しかしながら、多くの生徒は企業のWill・Needsを挙げるだけの知識がない。まずは図書館の新聞で関連する記事を探し、インターネットの情報を調べ、企業・業界の状況を知ることから始める。

そのうえで、ワークシートに沿って問いづくりを行う（図3）。まず、前述の3つを掛け合わせた「自分Will×企業Will」「企業Will×企業Needs」「自分Will×企業Needs」にある、小さな疑問をできるだけ多く挙げる。それらを3つのサブクエスチョン（SQ）にまとめ、さらに全体を貫くメインクエスチョン（MQ）を一つ設定するという流れだ。

実際に先輩が作成したMQを例示しながら、「一般論ではなく自分のWillが入っている」「個別企業ではなく業界全体に言及している」「社会課題を踏まえている」「自分なりの仮説がある」など良質な問いの特長を説明（図4）。ワーク中は教員が教室内を回って「これはどういうこと?」などと質問し、問いを磨く支援を行う。そうして、例えば「2040年の保育園は、保育士の人手不足や未就園児の受け入れなどの社会課題をどのように解決し、どのように自己表現のできる子どもに育てるのか?」といったMQをつくる。

「壮大な問いを設定し、その答えがインターンシップだけでは得られないことも多々あります。実態とのギャップに気づくだけでも、その職業や業界への固定観念を打破する良い機会になるのではないでしょうか」（森田直樹先生）

図3　私の「問い」作成ワーク

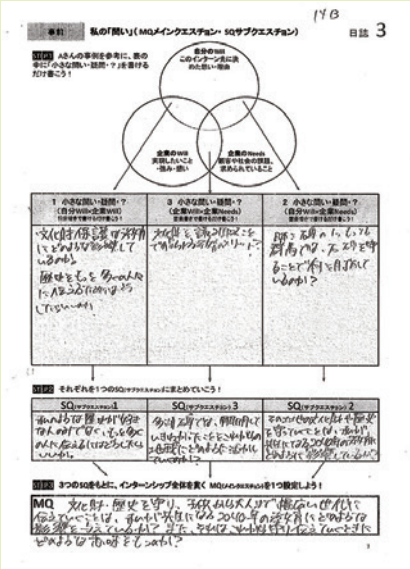
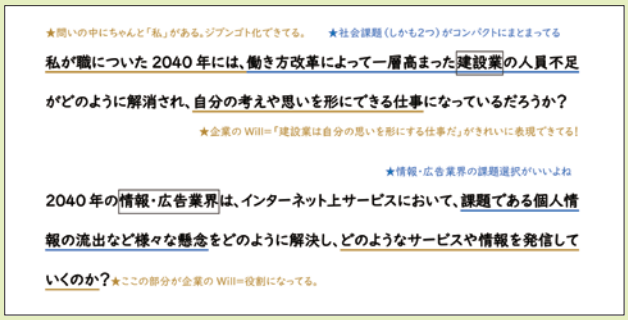


図2の日誌の一部。「自分のWill」「企業のWill」「企業のNeeds」の重なる部分から小さな問い・疑問を挙げ、MQとして集約していく。

図4　メインクエスチョンづくりのコツの説明資料より



前年度の生徒が作成した「問い」の文章を分解して、自分のWillや社会課題がわかるポイントを示している。

職場インタビューを行い仮説を検証する

3日間のインターンシップ中の活動内容は各事業所によってさまざまだが、従業員へのインタビューは必ず依頼している。生徒は事前ワークでMQ・SQを基に質問を準備し、相手の話を引き出す工夫をしてインタビューを行う。

インターンシップ終了後は、仕事の体験やインタビューで学んだことを踏まえて仮説の検証を行

生徒のインターンシップ先は多様な分野の企業、市役所、医療機関、学校などさまざま。写真はラジオ局（上）と産婦人科（下）での様子。

インターンシップ報告会は少人数に分かれて実施。受け入れ企業・団体の方と2年生も評価を行う。

う。その内容は資料にまとめ、報告会で発表する。報告会には、2年生のほかインターンシップ先の方も招き、ルーブリック評価やコメントをもらう。

「学んだことを表現して他者に伝えることは、本取組のポイントの一つ。校内だけでなく、外部からも評価を得ることを重視しています。資料作成や発表方法は細かく指導しないのですが、生徒はそれぞれで工夫して、お世話になった方を前に緊張しながらも嬉しそうに発表します」（吉永先生）

仕事に対する見方の刷新や肯定的な社会観に手応え

こうした探究型インターンシップから生徒が得るものは、体験の充実感や満足感だけではない。実施前と後の生徒アンケート結果を比較すると、「自身の人生への興味」「人生を自分の力で切り拓いていく意欲」「希望する生き方に向けた学習意欲」など、さまざまな項目のスコアが上昇している。

職業観に注目して事後アンケート結果を見ると、本取組を通じて「社会へより関わりたいと思えた」「働くことが楽しみに思えた」「企業や仕事について、より調べてみたいと思えた」という回答はそれぞれ9割を超える。フリーコメントには、「仕事への興味のもち方がガラリと変わった」「どんな技術や願いをもって仕事をしている

図5 生徒アンケート「インターンシップをきっかけに変わったと思うこと」

- 前の自分は仕事に対して大変そうというイメージしかもっていなかったけれど、インターンシップをやってから仕事への興味のもち方がガラリと変わったので、もっといろんなことを調べていきたいと思いました。
- 自分が興味のある分野以外の企業も、今回私が行ったインターンシップ先と同様にどんな技術や願いをもって仕事を行っているのか、という観点で見つめるようになった。年上の人と会話をするのが楽しくなった。
- 美術館の地域貢献の仕方、運営の仕方がわかった。屋外の企画展示の準備を行った時、地域と企業が協力して展示作業を進めていたのを見て、コネクションや力を貸してもらえるような誠実さをもつことの大切さを知った。一つの物事にも多くの人が関わっているのだと意識できるようになった。
- インターンシップ前は、単純な理由でこの職業になりたいって感じだったのが、このインターンシップをきっかけに、もっといろいろな職業を調べ、自分の興味関心のある職種を比較して自分にとって最適な選択ができるようになりたいと思えるようになりました。

かという観点で企業を見つめるようになった」など、仕事や働くことへの意識・見方の変化に言及する声が目立つ（図5）。本取組が職業観に好影響を与えていることがわかる。

「学校の成績では目立たない生徒が、生き生き取り組むことも珍しくありません。前任の教員の研究から、教科学力に表れる認知能力と、本取組に表れる非認知能力との間に相関が見られないという結果も出ています。本取組で自信をつけると、社会と関わっていくことを恐れなくなります。臆せず企業の方にメールを送り、依頼して断られることがあっても当然と受け止め、どこにでも飛び出していこうとする。肯定的な社会観が育っていると感じます」（森田先生）

インターンシップの経験は、2年次の個人テーマの探究活動につながる。2年生の浅香愛佑加さんは、インターンシップ経験を基に探究テーマを「ノーマライゼーション実現のために私たちができることは何か」と設定し、活動中だ。「障がいやマイノリティに対する偏見は無知から生まれる。まずは知ることが大切」と考え、1年生に対して手袋をつけて折り紙を折るなどの体験授業の実施や、多様性を表現するマークをデザインしてステッカーを配布するなどの活動を行っている。将来は多様な子どもを支援する人になるのが目標だという（下コラム参照）。

インターンシップにこれほど力を注ぐ進学校は、希少と言えるだろう。その意義の大きさは、生徒たちの成長する姿が何よりも雄弁に物語っている。「教科の授業に重点を置く進学校ほど、この取組を行う意義は大きい」とし、同校は今後もさらにこの取組を発展させていく方針だ。

＼ 生徒インタビュー ／

夢とロマンを守る仕事を通じ学習の重要性や物の見方を学んだ

歴史が好きなことと教育の仕事への関心から、多胡碑（たごひ）という文化財の保護・管理施設でインターンシップを行いました。働く方のお話や発掘現場の繊細な作業の見学などから、地道な努力と時代を超えたチームワークで文化財が守られてきたことを知り、夢とロマンを後世に残す仕事なのだと胸が躍りました。また、文化財保護の仕事に私たちが学んでいる数学や理科の知識を垣間見て無駄な勉強はないことや、歴史の多面性から物ごとを多面的に捉える重要性を学んだことも、大きな収穫です。（1年生・久保日菜子さん）

ノーマライゼーションの時代への期待と課題を考察

公認心理士の仕事に興味があり、心理相談室と児童発達支援事業所を自己開拓してインターンシップを行いました。今後、心の病や障がいをもつ子どもに対する公認心理士の需要が高まると考えています。すべての人が分け隔てなく生活を送るノーマライゼーションの時代に向けて、政府の支援や、多様性への理解者を増やす必要性を感じました。また、対面の直接的な対応を重視する両事業所において、SNSの普及や進化をどう活用していくべきなのか、新たな問いが生まれました。（2年生・浅香愛佑加さん）

Case 2

新しい技術にふれ、壁にもぶつかり、仕事のリアルに迫る

世羅高校（広島・県立）

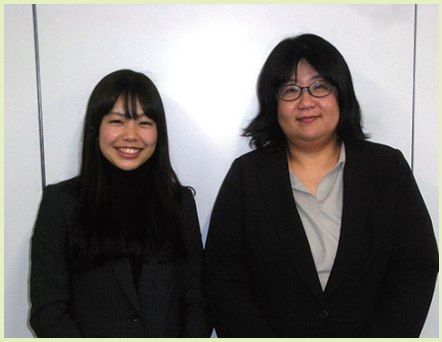
学校データ 1896年創立／普通科・農業経営科・生活福祉科／生徒数272名（男子153名・女子119名）、地域連携の教育活動を進めるとともに、海外姉妹校との交流や留学生受け入れで、国際感覚の育成も推進。

現場や最先端を知る社会人と生徒たちが協働で地域探究

広島県立世羅高校は、普通科・農業経営科・生活福祉科のある学校だ。

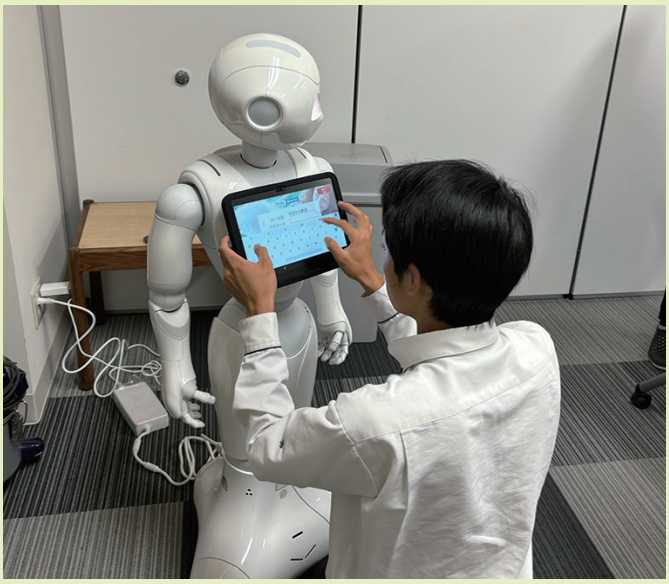
以前から普通科では、町役場や観光協会と連携し、町の活性化を目指す探究活動を行ってきた。また、農業経営科では、世羅茶の栽培・収穫・商品開発に生徒が携わったり、広島市内で養蜂に挑んだりと、地元産業と連携した学習も推進してきた。

生活福祉科では、2022年より町役場および大手IT企業と組み、生徒が講師となり、地元の高齢者のスマホの悩み相談にのる会を実施、大好評を博す。これを機に、世羅町と同企業は「デジタル人材育成とデジタル推進」で連携する協定を結び、スマホ相談会にとどまらず、世羅高校の生徒の日々の学習をICTの面でサポートする体制を整えていった。



左から、2023年度の総合的な探究の時間の主担当の平山愛佳先生、2024年度主担当の森由香里先生

こうしたなかで、同校は2年生の総合的な探究の時間のやり方を大幅に見直す。2023年



「福祉」を探究する生徒たちは、スマホ相談会を、企業の人から接し方を学んだうえで実施。「防犯・防災」および「歴史・地域資源」を探究した生徒たちは、公共の場でのAIロボットの活用を模索した。

取材・文／松井大助

度より、3学科の生徒が混ざり合って協働で探究する形にし、進路希望別に分かれた10のグループで、地域課題の発見・解決にあたるようにしたのだ。そしてその活動に、各科が築いてきたコネクションを最大限に生かし、多様な外部の協力を仰いだ。生徒からすれば、産官学のさまざまな職業の人と協働しながら探究する形だ。

改革の初年度に、この探究活動のまとめ役を担った平山愛佳先生は、一連の変化を前向きに捉えたという。

「以前に普通科のみで町の活性化の探究をしていた時も、生徒たちは最終的に町役場で具体的な提案をするところまでがんばっていたんです。ただ、本人たちの社会経験がまだ少ないこともあり、ネットなどで集めた情報を基にした、やや机上の空論に近い提案になりがちでした。その活動に地元の方や企業の方の目線も加われば、地域のために何ができるかを生徒たちはよりいろいろな観点から捉えて、考えを深めていけるのではないか、と思ったのです」

翌年の2024年度の探究活動を牽引した森由香里先生も、幅広い外部連携に手ごたえを感じたという。

「町のことに詳しい行政や事業者の方々と、新しい技術や視点をもつ企業の皆さんと、生徒たちがつながりながら、地域の課題と向き合う。そ

「地域商品」を探究した生徒たちは、ジャムやプリン、パン、猪肉などの地元の特産品について、生産者の元を訪れ、商品に込めた思いを聞き取ったうえで、ネット上のショッピングサイトで販売のPRをした。

ネット販売にあたり、IT企業の社員からWebマーケティングのことも学習。買いたいと思わせる表現や見せ方を学んだ。広く知らしめる重要性を知り、地元ラジオ局に自ら売り込んでPRした生徒もいた。

図1 探究活動における連携

主な連携先	主な活動（2024年度）
地元産業	●食品開発 ●観光イベント企画 ●地域商品のオンライン販売 ●IT管理のスマート農業の実証 ●観光施設へのAIロボット活用 ●防犯教室へのAIロボット活用 ●こども食堂（交流の場の創出） ●スマホ相談会 ●世羅町議会意見交換会
IT企業ほか民間企業	
自治体や大学	

うすると、今までにない新たな提案がいっぱい出てきたんですよ」

ひりつく体験があるから生徒の思考が深まっていく

例えば「地域商品」を探究したグループは、IT企業の社員が講師となる教育プログラムでWebマーケティングのことを学んだうえで、ネット上のショッピングサイトに販売ページを制作し、特産品を売ることに挑んだ。商品ラインナップでは、地元の道の駅や生産業者に協力を仰ぎ、彼らにインタビューもしたうえで、商品の説明や写真の見せ方を工夫してサイトでPRした。

「防犯・防災」を探究したグループは、世羅町や世羅警察署と連携し、地元の人向けの特殊詐欺防犯教室を開催することに。IT企業提供の別の教育プログラムでAIの活用を学んだので、防犯教室にAIロボットを使う企画を立案、当日の運用のためのプログラミングも行った。また、チラシを作って広報もした。

「保育・教育」を探究したグループは、地元事業者で結成された地域貢献団体と、子ども食堂を開催。農業経営科の育てた野菜を使ったメニューを考案し、子どもたちが遊べるイベントも企画した。

「科学研究」を探究したグループは、地元事業者と、児童センターと連携。同センターで、小学生に対して理科の実験と蚕の生態調査を行う交流活動を行った。

こうした社会人との協働で、生徒たちは「自分の進路をより具体的に想像できるようになった」と平山先生は感じている。特に印象的だったのは、期待ほどの結果が出なかった体験を生徒が味わったときだという。どうすればうまくいくのか自問し、社会人からもフィードバックをもらい、「次はこうしたい」「ここが大事だとわかった」などと、その分野の仕事への解像度が高まったのだ。

「地域商品のネット販売に挑んだグループは、企業の人から学んだことを生かしてがんばってページを作ったのですが、簡単には売れない現実も知り、ならこうしてみようと試行錯誤を重ねました。デザインに興味のあった生徒は、その

体験から『人々のニーズを捉える重要性を学んだ』そうです。そして『地域に寄り添って地域に喜んでもらえるデザインをやってみたい』という夢ももつようになりました」（平山先生）

なかには、活動後に進路を見直す生徒もいる。保育士になりたいと思っていた生徒は、子ども食堂の運営に携わるなかで、幼い子たちと関わることの難しさを実感。もう少し上の年齢層と接することをイメージするようになり、スポーツの指導者を目指すようになった。そのように「向いていない、と気づくのも一つの学びであり、悪いことだとは思っていません」と森先生は言う。

世の中の仕事にふれることを生徒と一緒に教員も楽しむ

また、多様な社会人と進める教育活動は、教員にとってもプラスになる、と森先生は捉えている。

「私は20年近く教員一筋でやってきたので、『学校以外の社会を知らない』と言われることがあり、それが結構コンプレックスでもあったんです。この仕事にプライドをもって取り組んできましたし、私生活でいろいろな職業の人に会えば話を聞いたりと、生徒の進路の参考になりそうな情報にアンテナも張ってきましたが、確かに、世の中の仕事について知らないことは多いですから。それだけに今、外の人と関わるなかで、生徒と一緒に私も学ばせてもらっているという感覚があります。例えば教員が意識しづらい『何のためにどうやって利益を出すか』といったことを。そうして自分の感じ取ったことも、進路相談や個別の授業に生かしていけたら、と思っています」

＼ 生徒インタビュー ／

相手の立場になって考え 人を笑顔にするような仕事を

探究では「観光」のグループで、町の関係人口を増やすことに、町役場や旅行会社、中山間地域振興をする方々と挑みました。世羅町は陸上が盛んなので、陸上教室を軸にいろいろな町の魅力を楽しめる宿泊プランを企画。東京の移住フェアでチラシを配り、SNSでも募集しました。でも定員に達せず中止に…。後日、学校で陸上教室を開いた時に、参加者が楽しんでくれたのが嬉しくて、支えてくださった社会人の方々が「プランは相手の立場になって考えよう」「人の笑顔を見られるから、やりがいがある」と言われていた意味がよくわかりました。また自分たちで企画したいです。（普通科2年生・鈴木雄貴さん）

Case 3

地域に根ざした仕事の工夫にふれ、将来をより創造的に思い描く

那賀高校（徳島・県立）

学校データ　1948年創立／普通科・森林クリエイト科／生徒数167名（男子95名・女子72名）、志願者を全国から募集、遠方から入学した生徒は寮生活を送る。那賀町との連携や国際交流活動を推進。

ステレオタイプではない多様な働き方を知るために

森林が95％を占める徳島県那賀町。那賀高校はその町にある、森林クリエイト科と普通科からなる学校だ。

2016年に創設された森林クリエイト科には3つのコースがあり、伐倒や伐採をする「林業実践」、木材等の商品開発をする「地域資源」、木材加工や商品販売に挑む「木材加工」のいずれかを専攻する。木を切り、活用方法を考え、加工して販売するという産業の流れに沿うもので、同校の丸山 稔先生は「仕事の実践そのものを授業に組み込んだもの」と語る。

しかもその活動で、林業関連の地元事業者や町・県・国の職員とも協働するという。例えば、住宅地の育ちすぎた樹木が自重で折れたり電線にかかったりしないよう伐採するのを、プロの管理の下で生徒が手伝う。さらに生徒が伐倒した樹木を使って、木工会社や木材チップ製造会社、製紙会社と協力し、木製の文具や遊具の商品開発にも挑む。また、校内の製材所に技術者を招き、あるいは事業者の設備を借りて、木工製品から、町の施設で使う看板やベンチまで製作する。そして全国のお店や地元のマルシェ、ネット通販サイトでの販売も。こうした実践的な学びを、各専攻の生徒が連携しながら行っているのだ。

左から、みらい創造部（総合的な探究の時間やDX、地域みらい留学などを推進）の部長の繁田大地先生、「特殊伐採隊丸山組　組長」の呼称でも親しまれている丸山 稔先生

一方の普通科も地場産業と組んだ教育活動を展開。2024年度からは探究活動やインターンシップをより地域密着で進めている。その理由を、繁田大地先生は次のように述懐する。

「生徒の頭の中にある『職業』といえば、飲食店や販売店の店員、研究所や工場で働く人、美容師など、身近に接点があるものやメディアでよく見るものがほとんどで、その枠内だけで進路を考えている生徒もいたのです。地域の中には、既存の枠を超えた働き方をしている人がいます。那賀町にも、捕獲した鹿や猪を調理・販売するジビエ料理の専門家や、標高1300mの山奥で宿を経営する方、乗馬やホースセラピーを手がける方などがいるんです。生徒が今ある知識だけでインターン先や進路を選ぶのでは

取材・文／松井大助

なく、地域の中に入って知らなかったことを体験し、『仕事ってもっと自由で、いろいろな働き方があるんだ』と感じながら進路を模索したほうが、未来の可能性が広がるのではないかと考えました」

できることや挑みたい問題を実体験から生徒が発見する

学んでいる生徒たちの意識は、特に入学当初は、千差万別だ。「林業を継ぎたい」「地域の中で学びたい」と、高いモチベーションをもった生徒がいる。一方で、勉強が得意ではなかったり、不登校を経験したりして、「この学校なら入れるから」と消極的な理由で門をくぐった生徒もいる。

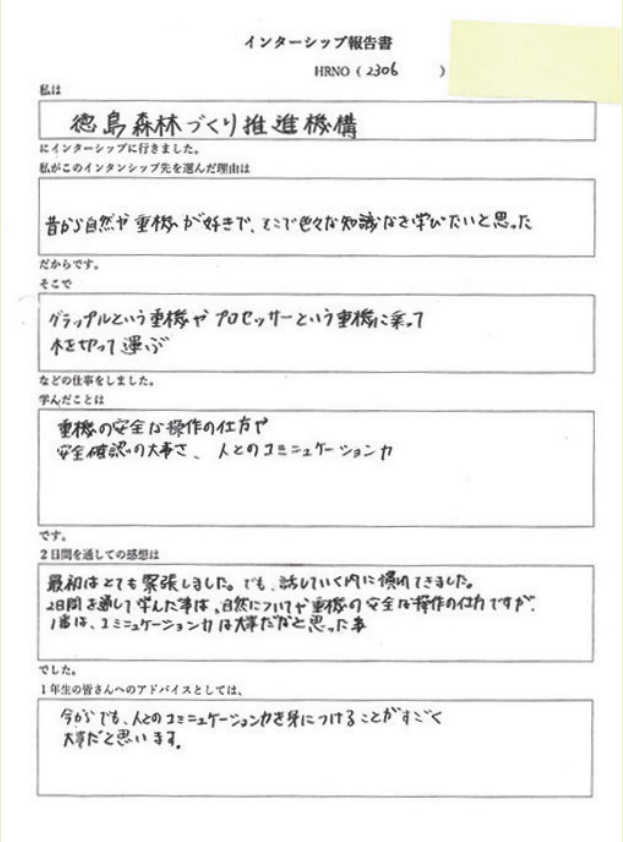
しかし、不本意な思いを抱えた生徒でも、「学校の外にまで出て学ぶと、できること、やりたいことを見つけて、どんどん伸びます」と丸山先生は言う。今までの生徒の成長を懐かしむような笑顔で、そうした変化を生むと思われる要因も語ってくれた。

「一つは、林業や農業を通して自然を相手にする楽しさを実感すること。二つ目は、実践的な活動を大人と一緒にやるなかで『こんな仕事があるんだ』『こういう考えがあるんだ』と身をもって学べること。三つ目は、自分のしたことで周囲から認められたり喜んでもらえたりすることです」

野球部があるからという理由で入学した生徒が、次第に林業実践にのめりこみ、成果を発表する全国大会で文部科学大臣賞を受賞。大学に進学し、林業の後継者を育てる教員を目指すようになったこともあった。仲良し3人組が「僕らで林業の会社を興す」と言い出し、皆でより高度なことが学べる専門の学校に進学したこともあった。

「その3人は、出前授業やインターンシップで、大手から独立した30代の林業経営者と関われたのが良かったのだと思います。仕事を創り出そうとする生徒まで現れるようになったのは嬉しかったです」（丸山先生）

ダウンロード可



インターンシップ報告書

HRNO（2306　）

私は

徳島森林づくり推進機構

にインターンシップに行きました。

私がこのインタンシップ先を選んだ理由は

昔から自然や重機が好きで、そこで色々な知識などを学びたいと思った

だからです。

そこで

グラップルという重機やプロセッサーという重機に乗って木を切って運ぶ

などの仕事をしました。

学んだことは

重機の安全な操作の仕方や安全確認の大事さ、人とのコミュニケーション力

です。

2日間を通しての感想は

最初はとても緊張しました。でも、話していく内に慣れてきました。2日間を通して学んだ事は、自然についてや重機の安全な操作の仕方ですが1番は、コミュニケーション力は大事だなと思った事

でした。

1年生の皆さんへのアドバイスとしては、

今からでも、人とのコミュニケーション力を身につけることがすごく大事だと思います。

インターンシップの振り返り

インターンシップの振り返りでは、どのような仕事をしたのか、そのなかで何を学んだか、どんなことを感じたか、といったことを言葉にして整理する。また、次年度に体験する1年生に向けたアドバイスも考える。

ダウンロード可　※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.454）

森林クリエイト科の活動。山の中での木の伐採、森林調査のためのドローン操作、木材を使った商品の開発や製作など、林業やその関連産業の仕事につながることを実践の中で学ぶ。

普通科の活動。野生動物によるジビエ料理を手がける会社や、地元の農作物による郷土食を製造販売する有志団体、那賀町から「木育」を発信する山のおもちゃ美術館などを訪問。

地域探究同好会やエシカルクラブなどの部活動でも、放置ゆずの収穫、環境配慮の消費を促すマルシェでの販売など、地域の未来を見すえた活動に取り組む。

普通科においても、探究活動やインターンシップを通して、生徒の進路に対する考えが深まりつつある。

「那賀町はゆずの生産でも有名なのですが、収穫しきれず放置されるゆずも多く、土の劣化や、獣が集まる問題も招いています。そうした地場産業の実情を知った生徒たちは、地域資源活用を本気で考えるようになり、化学の授業でゆずから精油や染料を抽出する実験をしたときも、熱心に取り組みました。『サイエンスの力を、専門の研究所や大学の研究室などで働かなくても、地方でより自由な形で使えるようにしたい』という思いをもって、進学した生徒もいま

す」（繁田先生）

生徒目線で活動内容を考え 生徒以上に現場を楽しみたい

生徒がやらされ感を抱かないよう、意識していることはあるだろうか。

丸山先生は事前のリサーチと打ち合わせを重視しているという。

「生徒はどんなことを知りたいか先に聞いておいて、協力していただく方を選び、打ち合わせをするんです。その必要性に気づいたのは、企業の方から『高校生は何を聞きたいんですか?』と問われてからでした。なるほどと思いましたね。私は『学校の立場』から活動を計画しようとしていたが、『生徒の立場』から考えるべきだったんだと。今は自分が生徒になったつもりで外部の人と話し合っています。そうすると、活動当日も『会社は創業何年で』といった一般的な話ではなく、生徒が知りたかったことをどんどん語ってもらえるんです」

繁田先生は、生徒たちと地域に出向いたときに「自分が一番楽しそうにする」ことを大事にしている。

「本校には、学ぶことや人と関わることに自信をもてずにいる生徒もいます。そうした生徒が自分の成長を感じられるように『何かに取り組んで心が動いたらその感情を出していこう』とも伝えているんです。だから私も、実は初対面が苦手なんですが、地域との関わりを楽しもう、と。『君たちより先生のほうが楽しんでいるから。それだけしか楽しめないの?』。そういう空気を、醸し出していけたらと思っています」

＼ 生徒インタビュー ／

コミュニケーションを取りながら 自然との共存を考えたい

授業やインターンシップで、林業の現場にふれてきました。そのなかで、この仕事は自然と向き合うだけでなく、人と話し合っていくものであることを知りました。例えば「間伐による土砂崩れを起こさないよう、どの木を切ってどの木を残せばいいか」で意見を交わしたりするんです。もともと自分はコミュニケーションを取るのがそこまで得意じゃないと思っているのですが…ただ、自然との共存のために切磋琢磨するようにコミュニケーションを取るのは、やってみたら得意でした。（森林クリエイト科2年生・森本天海さん）

楽しいことを一緒に創るうちに 自分も地元で挑戦したくなった

地域探究同好会という部活動で、地域活性化をしているような方々と関わっています。流しそうめんのイベントをしたり、ゆず狩りをしたり、山奥で宿を経営する人を訪ねたり。この学校を選んだのは近かったからで、同好会に入ったのは部活動紹介を見て「楽しそう」と単純に思ったからでした。でも、地元のために活動する人たちを見て、すごくいいな、と思うようになって。だから自分も高校3年間でこれという道を見つけて、地域のためになる活動に挑戦していきたいと思っています。（普通科1年生・疡原（じょうはら）悠豊さん）